

接続表現と列挙の文章構造の関係(1)

木 戸 光 子

1. はじめに

言語形式上の特徴に基づいて文章構造分析を行う際、文章構造の手がかりの一つとして接続表現は重要視されている。接続表現は、文と文との関係、文段と文段との関係を示すものである^(注1)。接続表現によって、文間の関係や文段間の関係を越えて、文章構造全体が変わることもある。

しかし、文章構造は一義的ではなく、多様性を含むものである。一つの文章は、読み手ごとに様々に理解されるもので、一つの文章構造のみに対応するものではない。また、一人の読み手によって複数の理解が可能なこともある。このような多様性の一方で、一つの文章の文章構造には何らかの共通するところがあるからこそ、文章を通して書き手の意図するところを読み手が理解することも可能なのである。

列挙の文章構造は複数の文を並べる際に「まず」「次に」「さらに」「また」など添加の接続表現で示されることが多い。列挙は同じ種類の内容を並べるという一見単純な文章構造だが、それでも、読み手に列挙内容ごとに接続表現を想定させると、全員が同じ種類、同じ言語形式を想定することはないだろう。

本稿では、文章構造の共通性と多様性を明らかにするため、列挙の文章構造を含む文章に関して、日本語母語話者と日本語学習者に対して接続表現の想定調査を行う。この調査結果の分析を通して、日本語母語話者と日本語学習者が文章構造をどのようにとらえているかを明らかにし、文章構造の共通性と多様性がどうして起こるのかを考察する。

文章構造の共通性と多様性は、日本語教育において、しばしば日本語学習者の書く文章が「日本語らしくない」と感じられることとも関係がある。文は正しく書かれているし、文章全体の意味も通じるのだが、何となく違和感を感じてもはっきりその原因を指摘できないことがある。この原因の一つは、文章の

内容の構造に適切な接続表現が選ばれていないためではないかと考える。接続表現の種類が適切でない場合、接続表現の種類が適切でも同じ種類の別の言語形式を選んでいる場合、選んだ言語形式の組み合わせが適切でない場合が見られる。結果的に、日本語母語話者とは異なる接続表現の組み合わせになっているわけである。

また、文章構造の分析方法について、多数と認定されたものを文章構造の典型例としてよいかということについても論じる。文章構造の共通性を引き出すやり方として、最も多く選ばれた接続表現を取り出して組み合わせた結果を、その文章の典型例あるいは代表例と見なせるのだろうか。例えば、同じ原文について複数の被験者が書いた要約文等において、書かれた文章の多様性が指摘されている^(註2)。同じ種類の言語形式を選んでも、まったく同じ言語形式を選んで組み合わせる者はほとんどいないという現象はしばしば起きている。統計的手法を用いても何を集計するかによって同じ現象が起こるだろう。

本稿では、まず、列挙の文章構造を含む文章に関して、日本語母語話者と日本語学習者に接続表現の想定を行った調査の概要を述べる。次に、調査結果について、想定された接続表現の種類と、実際に想定された言語形式を手がかりに、列挙を含む文章がどのような文章構造としてとらえられているかを分析し考察する。今回の調査は、統計的手法を用いたものでなく、個々の例を観察して分析・記述する方法を取った。最後に、複数の文章を収集して多数に共通するものを取り出して文章構造の共通性を探るような方法論の危険性、および、日本語教育での文章表現における連文中心の接続表現指導の問題点を論じる。

2. 接続表現想定調査の概要

調査で取り上げた文章は、添加の接続表現で列挙されるが、最後の列挙内容が添加以外の接続表現で示されるものである。このように、内容と形式は必ずしも一致するものではない。列挙内容を並べる文章構造が、何らかの要因で文章の途中から添加以外の接続表現で示されることもありうる。

本稿では、内容が示す文章構造と、接続表現のような言語形式が示す文章構造を区別する。列挙は、内容が示す文章構造で、内容を並べることである。列挙内容は、語、節、文などで表される。一方、添加は、文章展開機能を担う接続表現の種類を示すもので、接続表現のような言語形式により実現されるものである。ここで取り上げるのは、複数の文のまとまりの列挙で、文章全体の構

表1 接続表現想定調査票

(①～⑰は文番号。文番号は調査時はつけていない。)

氏名 ()

質問 次の文章を読んで、() に適当な接続詞を入れてください。

日本の物価はなぜ高い？

「地価」「流通機構」「規制」のほか、消費者の「ブランド志向」にも問題あり

①日本の物価が他の先進諸国に比べて高いということは、先に述べた通りです(→19項)。②では、なぜ日本の物価はそんなに高いのでしょうか。③いくつか理由を挙げてみましょう。

④()、大都市圏を中心に上昇している土地の価格が、物価水準を押し上げている要因の一つです。⑤東京23区の土地の値段で、アメリカ全土が買えるといわれているほどです。

⑥したがって、銀座で食べる1000円のラーメンと田舎で食べる500円のラーメンの味が同じでも、何ら不思議なことはありません。⑦日本一物価の高い銀座では土地にかかる税金やテナント料も高いため、その分が費用として商品の価格に反映されるわけです。⑧つまり、ラーメンの価格の差500円のかんりの部分が、土地代となっているのです。

⑨()、日本の流通機構が複雑すぎることも、一つの理由として挙げられます。⑩各流通段階でマージンが上乘せされるわけですから、いきおい価格も高くなっていきます。

⑪()、モノやサービスの価格にさまざまな規制が働いていることも、価格を割高にしている要因として見逃せません。⑫公共料金の多くが他の先進諸国に比べて割高になっているのは、その分野での競争原理が働きにくいからです。

⑬()、日本の物価を押し上げているのは、私たち消費者の行動や好みにも問題があると指摘されています。

⑭たとえば、日本人のブランド志向です。⑮欧米のブランド品の価格は、本国よりも日本のほうが高いものが多くなっています。⑯値段を下げるとブランドイメージに傷がつき、逆に売れなくなると考えられています。⑰また、会社や個人の見栄も問題の一つとっていいでしょう。

(大和総研『経済のしくみ』日本実業出版社より)

造に列挙が影響を及ぼしているものである。

一般的に、内容を列挙する際に用いる言語形式は、「まず」「次に」といった添加の接続表現である^(注3)。しかし、内容を列挙する文章の中には、一般則に従わないものがある。それは、添加以外の接続表現を使う場合、接続表現を使わない場合である。

2.1 列挙の文章構造を含む文章

列挙の文章構造を含む文章として「日本の物価はなぜ高い？」という説明文を取り上げた(表1参照)。この文章は、経済のしくみについて一般向けに解説した本の一部である(大和総研『経済のしくみ』参考文献参照)。この文章では、表2のように、「では、なぜ日本の物価はそんなに高いのでしょうか。」と問題提起をして、「いくつか理由を挙げてみましょう。」という文で理由を列挙する予告をし、以下理由を述べている。この文章を列挙の文章構造ととらえるのは、「いくつか理由を挙げてみましょう。」という複数の理由を述べる予告をするメタ言語的な文があるからである^(注4)。

なお、原文の接続表現は次のとおりである。

- | | |
|---------------|--------------|
| 1 番目 (まず) | 添加の接続表現 |
| 2 番目 (次に) | 添加の接続表現 |
| 3 番目 (また) | 添加の接続表現 |
| 4 番目 (しかし一方で) | 逆接 + 対比の接続表現 |

表2 原文の文章構造

文番号	文段の機能	接続表現	接続表現の種類
①～③	問題提起		
④～⑧	理由1	まず	添加
⑨～⑩	理由2	次に	添加
⑪～⑫	理由3	また	添加
⑬～⑰	理由4	しかし一方で	逆接 + 対比

この文章を選んだのは、列挙内容と接続表現が一致していない部分があり、被験者に接続表現の想定をさせることで、文章構造における、接続表現の文章

展開機能が明らかになると考えたからである。4つの列挙内容がはっきりしているにもかかわらず、列挙の文章構造が単純に追加の接続表現のみで示されず、4番目の理由が追加以外の接続表現で示されている。列挙内容は、4つの理由が列挙される際、1番目から3番目の理由は「まず」「次に」「また」と追加の接続表現で示される。一方、4番目の理由は「しかし一方で」と逆接の「しかし」と対比の「一方で」を組み合わせた接続表現で示される。

2.2 接続表現想定調査の方法

調査対象は、日本語母語話者14名と、中上級レベル（日本語能力検定試験1級または2級合格程度）の日本語学習者15名の計29名である。日本語学習者は授業で連文レベルの接続表現を学習している^(注5)。なお、複数記入してあった3名については、一番はじめに書いてあったものだけを調査対象とした。

表1のように、原文にある4つの理由に関しては、1つの理由は1つまたは2つの形式段落から構成されている。理由が変わるごとにその形式段落のはじめに接続表現がある。その接続表現を空欄にして、被験者に接続表現を記入してもらった。

3. 調査結果の分析と考察

日本語母語話者14名（J 1-14）と日本語学習者15名（L 1-15）の想定した

表3 日本語母語話者と日本語学習者の想定した接続表現のリスト

	J1	J2	J3	J4	J5	J6	J7	J8	J9	J10	J11	J12	J13	J14	
1番目	まず	まず	まず	まず	まず	まず	まず	まず	まず	まず	まず	まず	まず	まず	まず第一に
2番目	次に	次に	次に	次に	次に	次に	次に	そして	そして	そして	そして	また	また	また	
3番目	さらに	さらに	それから	それから	そして	そして	そして	さらに	さらに	それから	また	また	また	また	
4番目	最後に	その他	また	しかるが	また	さらに	さらに	また	また	また	しかし	さらに	一方	しかし	
	L1	L2	L3	L4	L5	L6	L7	L8	L9	L10	L11	L12	L13	L14	L15
1番目	まず	まず	まず	まず	まず	まず	まず	まず	まず	まず	まず	いわば	いわば	たとえば	(想定せず)
2番目	次に	つぎに	次に	次に	そして	そして	そして	さらに	そのうえ	さて	つまり	次に	そして	また	それに
3番目	また	また	そして	さらに	さらに	次に	それから	ところが	次に	そして	しかし	それから	さらに	それに	そのうえ
4番目	さらに	さらに	それから	そのうえ	そのうえ	それから	また	しかし	最後に	しかし	したがって	そのうえ	しかし	さらに	しかし

表4 日本語母語話者と日本語学習者の想定した接続表現の集計結果

	日本語母語話者 (J 1-14)					日本語学習者 (L 1-15)					日本語母語話者と日本語学習者の合計				
	1番目	2番目	3番目	4番目	計	1番目	2番目	3番目	4番目	計	1番目	2番目	3番目	4番目	計
ま ず	13				13	11				11	24	0	0	0	24
まず第一に	1				1					0	1	0	0	0	1
次 に		7			7		5	2		7	0	12	2	0	14
そして		4	3		7		4	2		6	0	8	5	0	13
また		3	4	5	12		1	2	1	4	0	4	6	6	16
さらに			4	3	7		1	3	3	7	0	1	7	6	14
それから			3		3			2	2	4	0	0	5	2	7
そのうえ					0		1	1	3	5	0	1	1	3	5
それに					0		1	1		2	0	1	1	0	2
最後に				1	1				1	1	0	0	0	2	2
その他				1	1					0	0	0	0	1	1
〈添加〉	14	14	14	10		11	13	13	10		25	27	27	20	
しかし				2	2			1	4	5	0	0	1	6	7
しかしながら				1	1					0	0	0	0	1	1
ところが					0			1		1	0	0	1	0	1
〈逆接〉	0	0	0	3		0	0	2	4		0	0	2	7	
一 方				1	1					0	0	0	0	1	1
〈対比〉	0	0	0	1		0	0	0	0		0	0	0	1	
つまり					0		1			1	0	1	0	0	1
たとえば					0	1				1	1	0	0	0	1
いわば					0	2				2	2	0	0	0	2
〈同列〉	0	0	0	0		3	1	0	0		3	1	0	0	
さ て					0		1			1	0	1	0	0	1
〈転換〉	0	0	0	0		0	1	0	0		0	1	0	0	
したがって					0				1	1	0	0	0	1	1
〈順接〉	0	0	0	0	0	0	0	0	1		0	0	0	1	
ぜ 口					0	1				1	1	0	0	0	1
〈連鎖〉	0	0	0	0		1	0	0	0		1	0	0	0	

接続表現を表3に示す。表4は表3を集計してまとめたものである。

		1 番 目	2 番 目	3 番 目	4 番 目
添加	まず まず第一に 次に そして また さらに それから そのうえ それに 最後に その他	1 3 1	7 4 3	3 4 4 5	5 3 1 1
逆接	しかし しかしながら ところが				2 1
対比	一方				1
同列	つまり すなわち たとえば いわば				
転換	さて				
順接	したがって				
連鎖	(想定せず)				

図1 日本語母語話者の想定した接続表現の言語形式と出現順
(数字はその言語形式を想定した被験者数)

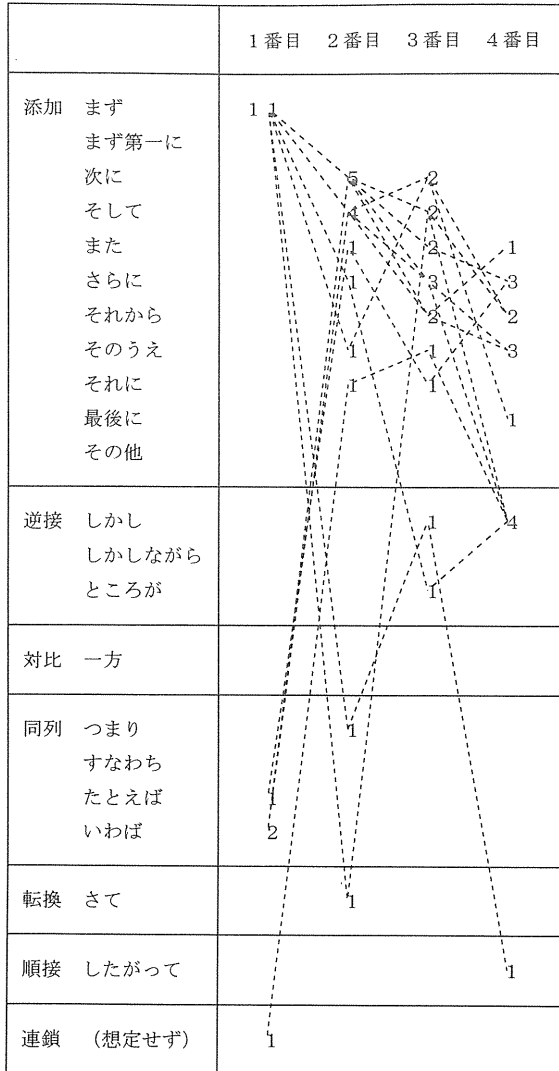


図2 日本語学習者の想定した接続表現の言語形式と出現順

個々の被験者が想定した1番目から4番目までの組み合わせを図1と図2にまとめた。

以下、想定された接続表現を詳しく見ていく。

3.1 想定された接続表現の種類

3.1.1 接続表現の種類と出現順

どのような順番でどのような接続表現の種類が想定されているかを表5に示す。

表5 想定された接続表現の種類別の出現順

1 番目	→ 2 番目	→ 3 番目	→ 4 番目	日本語母語話者	日本語学習者	計
添加	→ 添加	→ 添加	→ 添加	10	8	18
添加	→ 添加	→ 添加	→ 逆接	3		3
添加	→ 添加	→ 添加	→ 対比	1		1
添加	→ 添加	→ 逆接	→ 逆接		1	1
添加	→ 転換	→ 添加	→ 逆接		1	1
添加	→ 同列	→ 逆接	→ 順接		1	1
同列	→ 添加	→ 添加	→ 添加		2	2
同列	→ 添加	→ 添加	→ 逆接		1	1
連鎖	→ 添加	→ 添加	→ 逆接		1	1

表5によると、1番目から4番目までに出てくる接続表現の種類が限られていることがわかる。特に、「添加→添加→添加→添加」と想定した者は、日本語母語話者10名と日本語学習者8名で最も多い。

想定された接続表現の流れは、日本語母語話者は3つで、しかも、1番目から3番目までは全員添加の接続表現を想定している。一方、日本語学習者は7つに分かれた。すなわち、日本語母語話者が4番目に想定した添加、逆接、対比の接続表現によって分かれたのに対し、日本語母語話者は1番目から添加以外の接続表現を想定しており、2番目以降もいくつかの種類接続表現を想定している。

3.1.2 4番目の接続表現

原文の4番目は「しかし一方で」という逆接と対比が組み合わされた接続表現である。しかし、日本語母語話者10名と日本語学習者8名が「添加→添加→

「追加→添加」を想定した。このことから、4番目に逆接か対比の接続表現がなければ、書き手の意図に反して、日本語母語話者でも単なる理由の列挙と読み取る可能性があることがわかる。理由の列挙を予告する文があること、1番目から3番目までの列挙内容が添加の接続表現で示されていることが影響していると考えられる。

3.2 想定された接続表現の言語形式

3.2.1 添加の接続表現の出現順

3.1で述べたように、「添加→追加→追加→添加」と想定した者は、日本語母語話者10名と日本語学習者8名で最も多かった。しかし、添加の接続表現のうち、具体的にどんな言語形式を想定したかは日本語母語話者と日本語学習者で異なる。表6にどんな言語形式が想定されたかをまとめる。これは、一人の被験者ごとに1番目から4番目を通して見たのではなく、1番目だけ、2番目だけというように、一連の流れとは切り離してまとめたものである。

表6 日本語母語話者と日本語学習者が想定した接続表現

	1番目	2番目	3番目	4番目	接続表現の種類
日本語母語話者と日本語学習者の両方が想定した接続表現	まず	次に そして また	そして また さらに それから	また さらに	添加
				最後に しかし	
日本語母語話者のみが想定した接続表現	まず第一に			その他	添加
				しかしながら	逆接
				一方	対比
日本語学習者のみが想定した接続表現		さらに そのうえ それに	そのうえ それに	そのうえ	添加

			次に	それから	
			しかし ところが		逆接
	たとえば いわば				同列
		つまり さて			転換
				したがって	順接

表6によると、添加の接続表現において、1番目には「まず」、2番目には「次に」「そして」「また」が双方に出てくる。しかし、2番目に「さらに」「そのうえ」「それに」を想定する日本語学習者はいるが、日本語母語話者はいない。3番目の「次に」「そのうえ」「それに」、4番目の「それから」「そのうえ」も同様である。

添加の接続表現のうち、序列を示すものは、何番目にどんな言語形式が出てくるが決まっていると言えよう。何か特別な文脈がない限りは、「まず」が1番目、「次に」が2番目、「さらに」が3番目で、最後に列挙する内容が「最後に」で示されるだろう。この文章のように4つの列挙内容がある場合に、2番目に「さらに」、3番目に「次に」は想定されにくいのではないだろうか。

3.2.2 添加の接続表現「そのうえ」「それに」

2番目、3番目、4番目の添加の接続表現は、1番目に比べていろいろな言語形式が想定されている。しかし、「そのうえ」「それに」は日本語母語話者は想定していない。調査人数が少ないにしても、この文章の文章展開では日本語母語話者の直観ではあり得ないという可能性も考えられる。つまり、添加の接続表現ならばどんな言語形式でもよいとは言えない。2文の関係である連文ではなく、それ以上の複数の文のまとまりにおける文章展開機能によって言語形式が使い分けられていると考えられる。いくつかの列挙内容を並べるだけの文章展開機能を「そのうえ」「それに」は担わないのではないか。

3.2.3 4番目に逆接の接続表現が出てくる過程

4番目に逆接の接続表現を想定したのは、日本語母語話者3名、日本語学習者4名であった。しかし、1番目から想定された接続表現を見ていくと、逆接に至る過程は同じではない。

表7 4番目に逆接を想定した場合の接続表現の流れ

	想定した接続表現			
	1番目	→ 2番目	→ 3番目	→ 4番目
日本語母語話者				
J 4	まず	→ 次に	→ それから	→ しかしながら
J 11	まず	→ そして	→ また	→ しかし
J 14	まず第一に	→ また	→ また	→ しかし
日本語学習者				
L 8	まず	→ さらに	→ ところが	→ しかし
L 10	まず	→ さて	→ そして	→ しかし
L 13	いわば	→ そして	→ さらに	→ しかし
L 15	(想定せず)	→ それに	→ そのうえ	→ しかし

表7を見ると、4番目の逆接に至るまでの過程は、日本語母語話者3名は、1番目から3番目の理由を添加の接続表現によって同じ種類の列挙内容としている。逆接を使うことによって、4番目の理由を1番目から3番目の理由とは異なるものとして分けていると言える。

それに対して、日本語学習者は4つの列挙内容を日本語母語話者のようには2つには分けて考えていないようである。L 8は3番目にも逆接の接続表現「ところが」を想定している。L 10は2番目に転換の接続表現「さて」を、L 13は1番目に同列の接続表現「いわば」を想定している。L 15は接続表現を想定していない。すなわち、理由が4つ列挙されるという文章構造は、これらの日本語学習者の想定した接続表現には見られないのである。

3.2.4 添加の接続表現「また」

添加の接続表現「また」の使い方が日本語母語話者と日本語学習者では異なっている。日本語母語話者は、2番目に3名、3番目に4名、4番目に5名が「ま

た」を想定している。それに対し、日本語母語話者で「また」を想定しているのは、2番目に1名、3番目に2名、4番目に1名である。

日本語母語話者で3番目に「また」を想定した4名のうち3名は、2番目と3番目と4番目を「そして→また→しかし」、「また→また→しかし」、「また→また→一方」と、添加から逆接または対比の接続表現にしている。2番目の「また」は列挙内容を並列していると考えられる。

それとは違い、4番目の逆接の「しかし」や対比の「一方」の前にある3番目の「また」は、単なる並列とは異なり、次の文章展開が変わることを予告する転換の接続表現のような機能を担っていると言える。

1番目から4番目まで添加の接続表現を想定して最後の4番目の理由に「また」を想定しているのは、単なる理由の並列を示すと考えられる。一方で、最後の4番目の理由が3番目までの理由とは異なる文章展開を示すが、逆接や対比ほどには文章展開の断絶がない場合に軽い転換の機能として用いているとも推察される。日本語母語話者が「そして」「それから」を4番目に想定していないことから、添加の接続表現の機能を連文以上のまとまりの中で再検討する必要がある。

3.2.5 「日本語らしくない」要因

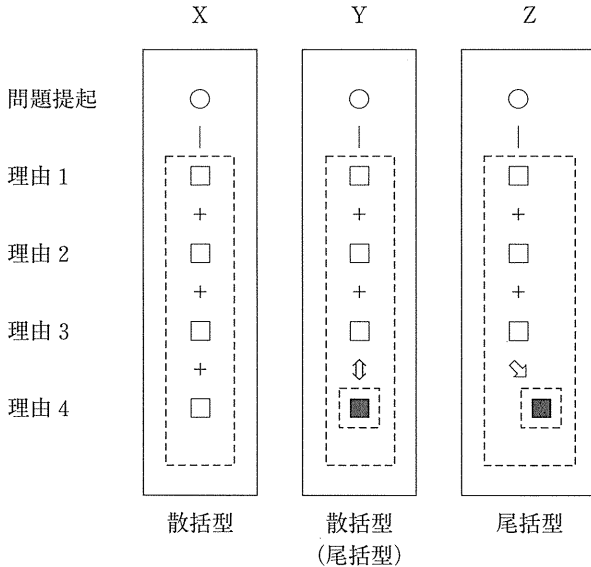
日本語学習者の書いた文章に違和感を抱くのは、大まかな内容は伝わるが、「日本語らしくない」と直観的に思うときである。接続表現の想定から次の2点が言える。一つは、想定した接続表現の種類は適切でも、想定した言語形式が「日本語らしくない」と思われるものだという点である。もう一つは、文章の全体構造に至る過程が日本語母語話者とは異なっているため、「日本語らしくない」印象を与えることである。調査した列挙の文章構造では、4つの列挙内容の2番目に「さらに」、3番目に「次に」を想定したり、「そのうえ」「それに」を想定したりすることである。それから、4番目の「しかし」の前の3つの列挙内容が添加の接続表現で示されず、4つの列挙内容の文章構造がはっきりととらえられない場合である。

3.3 文章構造の多様性と共通性

3.3.1 接続表現の想定結果に基づく文章構造類型

ここでは、日本語母語話者のデータをもとに、列挙の文章構造全体に関して述べる。4番目を添加の接続表現と想定した場合と、逆接あるいは対比と想定

した場合とでは、図3のように列挙の文章構造のとらえかたが異なっていると考えられる。



(+は添加, ⇕は対比, ↷は逆接, |は連鎖を意味する)

X 「添加→添加→添加→添加」散括型

Y 「添加→添加→添加→対比」散括型 (あるいは尾括型)

Z 「添加→添加→添加→逆接」尾括型

図3 4番目に想定した接続表現と文章構造との関係

Xは言語形式と内容が一致している場合で、添加の接続表現が列挙内容を並べことを示しており、文章構造類型は散括型である^(注6)。Yは1番目から3番目までと、4番目の2つに理由が分けられ、対比されている。列挙内容が二分されて対等に並べられている場合は散括型だが、二分された列挙内容の後者の方が強調されていれば尾括型になる。Zは、4番目の逆接の接続表現によって列挙内容が二分され、さらに、二分された中で後者が前者の否定になる。したがって、全体をまとめるのは後者のほうであるから、尾括型になる。

散括型では列挙の文章構造は保たれるが、尾括型ではそれぞれの列挙内容を

並列していたバランスが崩れ、列挙の文章構造から他の文章構造に変化していくとも考えられる。

3.3.2 列挙の文章構造の多様性と共通性の要因

列挙の文章構造が一義的ではなく、多様性を持つのは、添加をはじめ接続表現の種類がいくつか想定されうることから考えられる。また、同じ添加の接続表現の中でも、どの言語形式が想定され、どのような順番で組み合わせられるかも文章構造の多様性を裏付けるものである。

一方、接続表現の種類から見ると、1番目から4番目まで添加を想定した被験者が最も多く、理由の列挙という点で文章構造の共通性も見られる。日本語母語話者14名中10名、も日本語学習者15名中8名が文章の全体構造では共通性を持っていると言える。

しかし、日本語母語話者は日本語学習者に比べて、例えば、添加の接続表現の中でも言語形式の選択や出現順はかなり限られている。文章の全体構造との関係で、同じ添加の接続表現でも想定しにくい言語形式があるようである。日本語母語話者の文章構造の共通性はある程度特定できるのではないか。

4. 文章構造の研究方法与日本語教育への応用における問題点

4.1. 文章展開の流れから切り離れた集計方法の危険性

統計的手法を使って複数の文章を収集して多数に共通するものを取り出して文章構造の共通性を探る方法があるが、このような方法論は個々の被験者の文章のどんな特徴を反映しているのだろうか。

表8 想定された接続表現のうち最も多数を集めた組み合わせ

	1番目	→	2番目	→	3番目	→	4番目	
日本語母語話者と日本語学習者	A	まず	→	次に	→	さらに	→	そして
	B	まず	→	次に	→	さらに	→	さらに
	C	まず	→	次に	→	さらに	→	しかし
日本語母語話者	D	まず	→	次に	→	また	→	また
	E	まず	→	次に	→	さらに	→	また
日本語学習者	F	まず	→	次に	→	さらに	→	しかし

表4の集計結果から、日本語母語話者と日本語学習者が最も多く想定した接続表現の言語形式を集めて、仮に1番目から4番目までの組み合わせを表8に作ってみた。

表3の個々の被験者が想定した1番目から4番目までの組み合わせを調べると、表8のAかBかCと同じ接続表現を同じ順番で想定した者はいなかった。DかEを想定した日本語母語話者も、Fを想定した日本語学習者も一人もいなかったのである。なお、CとFは結果として同じものになった。

今回の調査では日本語母語話者も日本語学習者も、最も多数のものを取ったいわゆる典型例と同じ接続表現の言語形式を組み合わせを持っていない。木戸(1989)において要約文の調査をした際にも同じような現象が見られた。つまり、統計上多数と認定された原文の単位を多い順に組み合わせて要約文の典型例を作ったところ、それと同じ単位をすべて持つ個人の要約文は一つもなかったのである^(註7)。

これは、統計的手法がよくないのではなく、もともと文章展開の中の一連の流れの中に存在していたものを別々に切り離して、切り離れた部分のみに対して統計的検定をすることに問題がある。今回の調査に関して言えば、1番目から4番目までの想定された接続表現を分解しないで、どんな接続表現がどんな順序で出現するかを一つ一つの例ごとに分析し記述し、その上で、それぞれの例をまとめて総合的に分析することが重要であろう。

4.2 連文中心の指導の不十分さ

今回の接続表現想定調査を通して、連文すなわち2文の関係での使い分けのみを学習しても、学習者は文章全体の展開機能として接続表現を使えるようにはならないことがわかった。日本語学習者の想定した接続表現を見ると、添加の接続表現が文章の中で、特に、文段間の関係づけをするために適切に使えていない。

日本語教育において、接続表現は文や文段の関係を示すものとして、作文や読解で重視されている。しかし、現状では、接続表現によってどのように文章の全体構造が変わり、書き手の意図がどのように変わるか等について、教師の直観を頼りに指導されているようである。

5. おわりに

本稿では、日本語母語話者と日本語学習者が想定した接続表現を手がかりに、列挙の文章構造がどのような文章構造としてとらえられているかを分析し考察した。列挙の文章構造のような一見自明で単純なものでも、接続表現によって文章構造が変化する可能性があることを指摘した。

今回の接続表現想定調査を通して、接続表現がなければ原文と異なる文章構造を読み取る場合と、接続表現がなくても原文と同じ文章構造を読み取る場合があることがわかった。また、今回あえて統計的手法を用いなかったが、調査数が多くなっても今回と同じ結果が出るのか、統計的手法で検証してみることは重要である。

接続表現を想定する方法は、文章展開機能を言語形式に置き換えること、すなわち文章の意味内容を言語形式内に還元することによって、文章構造を解明するやり方である。しかし、言語形式としての接続表現そのものの意味・用法について各人で同じものを共有しているのかという問題もある。このような言語使用者における多様性のほかに、接続表現の意味用法の記述の多様性の問題も考えなくてはならない。今回は接続表現の種類分類に関しては市川(1978)に従ったが、沖(1999)の指摘のように一語一機能説に基づく接続表現の分類には限界がある。

さらに、今回、日本語母語話者14名だけでも、接続表現の言語形式の想定と組み合わせには同じものがほとんどなかったという言語形式の選択と組み合わせの問題もある。ベケシュ(1991)のニュース文の日英パラフレーズ調査の中の言葉を借りると、接続表現に関して連文レベルの指導しか受けなかった日本語学習者は、連文レベルの「シンタクス手段に操られた」ということであろう。日本語母語話者は、列挙の文章構造に適した日本語の接続表現の言語形式の選択と組み合わせという「シンタクス手段に操られた」ということかもしれない。

文章構造の共通性と多様性を考える上で、接続表現の種類や、同じ種類の接続表現の中のどの言語形式が選択され、組み合わせられて、どのような文章構造を作り出していくのか、今後さらに研究する必要がある。

謝辞 接続表現想定調査の際、研究目的で使用することを承諾してくださった1998年度の筆者の授業の受講者の方々に感謝いたします。

注

1. 本稿では「接続詞」ではなく「接続表現」と呼ぶ。文の要素としての品詞ではなく、文章構造の手がかりとなる要素の一つだからである。同様に、文と文章の間の単位を「段落」ではなく「文段」と呼ぶ。寺村・佐久間・杉戸・半澤(1990)参照。
2. 佐久間(1989), ベケシュ(1991), 呂本(1992)参照。
3. 接続表現の分類は、市川(1978)の文の連接関係の基本的類型(pp. 88-93)に従う。以下、基本的類型の説明を引用する。市川は「接続表現」ではなく「接続語句」と呼んでいる。
 順接型 前文の内容を条件とするその帰結を後文に述べる型。
 逆接型 前文の内容に付け加わる内容を後文に述べる型。
 対比型 前文の内容に対して対比的な内容を後文に述べる型。
 転換型 前文の内容から転じて、別個の内容を後文に述べる型。
 同列型 前文の内容と同等とみなされる内容を後文に重ねて述べる型。
 補足型 前文の内容を補足する内容を後文に述べる型。
 連鎖型 前文の内容に直接結びつく内容を後文に述べる型。(接続語句は普通用いられない。)
 なお、本稿では「～型」は省略して、「添加」「逆接」のように呼ぶ。
4. 「メタ言語的な文」というのは、文章の実質的な内容を表さず、文章展開機能だけを表すだけの文のことをいう。「メタ言語的」については、杉戸・塚田(1991)参照。日本語教育の作文教科書では、浜田・平尾・由井(1997)の「行動を述べる文」、二通・佐藤(1999)の「関係指示文」がこれに相当するだろう。
5. 授業で使用した教科書は、佐々木・松本(1990)の一部。この教科書の接続詞の分類は、市川(1978)の分類とほぼ同じと見られる。
6. 佐久間(1989) p. 237参照。「原文残存認定単位の判定作業の結果からは、ごく限られた結論しか得られていない。統計的検定に基づき、上位150字残存認定単位を決めたが、これを直ちに要約文のモデルとするわけにもいかない。木戸(第7章, p. 122)によれば、上位150字残存認定単位を全て用いた要約文は皆無に近いという。」
7. 文章構造類型については佐久間(1986)に従う。

参考文献

- 市川 孝(1978)『国語教育のための文章論概説』教育出版
 沖 裕子(1999)「逆接について」『国語学会平成11年度春季大会要旨集』国語学会,
 pp. 84-91
 樺島忠夫(1983)「文章構造」水谷静夫編『朝倉日本語講座5 運用I』朝倉書店
 木戸光子(1989)「文の機能による要約文の特徴」佐久間(1989)所収, pp. 112-125
 佐久間まゆみ(1986)「論説文の文章・文段構造と要約文の類型について」『筑波大

- 学留学生センター日本語論集』第2号, pp. 1-29
- 佐久間まゆみ編 (1989) 『文章構造と要約文の諸相』 くろしお出版
- 佐々木仁子・松本紀子 (1990) 『日本語能力試験対策日本語総まとめ問題集 [文法・読解編]』 凡人社
- 杉戸清樹・塚田実知代 (1991) 「言語行動を説明する言語表現」『国立国語研究所報告』 103
- 大和総研 (1990) 『経済のしくみ』 日本実業社
- 寺村秀夫・佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一編 (1990) 『ケーススタディ日本語の文章・談話』 おうふう
- 時枝誠記 (1950) 『日本文法口語篇』 岩波書店
- 二通信子・佐藤不二子 (1999) 『留学生のためのレポートの文章』 凡人社
- 浜田麻里・平尾得子・由井紀久子 (1997) 『大学生と留学生のための論文ワークブック』 くろしお出版
- ベケシュ, アンドレイ (1991) 「修飾語順とテキストのマイクロ構造—クローズ組み合わせにおける日英比較—」『第4回日本語教育連絡会議総合報告書—東欧圏の「民主化」と日本語教育—』 pp. 50-63
- 邑本俊亮 (1992) 「要約文章の多様性—要約産出方略と要約文章の良さについての検討—」『教育心理学研究』 Vol.40 No.2, 日本教育心理学会, pp. 93-103